

控物次平形錢

毒矢

野村胡堂

青空文庫

「ヘツヘツ、ヘツヘツ、随分間拔けな話ぢやありませんか」

ガラツ八の八五郎が、たがが外れたやうに笑ひながら、明神下の平次の家に笑ひ込むのです。

世間はまだ松が取れたばかり、屠蘇とその香りがプンプンとして居やうといふ時ですから、笑ひながら来る分には、腹も立ちませんが、それにしても、かう不遠慮にやられては、御近所の衆が膽きせをつぶします。

「八の野郎がまた、ゲラゲラ笑ひながら舞ひ込んで來たやうだ。火鉢の中へ唐辛子たうがらしでも燻いぶして置け」

平次は苦々しく舌打をしますが、實は久しく顔を見せなかつた八五郎を、心の中では待ち焦こがれてゐたのです。

「それには及びませんよ。——可笑しいの可笑しくねえの——つて、ヘツヘツ」

「呆あきれた野郎だ。挨拶もせず、笑つてやがる」

「相濟みません。尤も、元日早々御年始には來た筈で」

「挨拶は年に一度で濟む氣で居やがる。——何がそんなに可笑しいんだ。俺はもう、腹が立つて、腹が立つてたまらねえが」

「まだ正月だといふのに、何をそんなに腹を立てるんです。あつしはもう、面白くて可笑しくて」

「俺はまた癪しゃくにさはることばかりだよ。暮に拂へなかつた店賃たなちんを、三つまとめて大家のところへ持つて行くと、苦しいのはわかかつてゐるから、そんな無理をするには及ばない、改めて盆にでも貰ふからと、そつくり返して來たぢやないか」

「へエ、それで腹が立つんですか、親分は」

「人を見くびるにも程があるよ。一人で腹を立てて居るところへ、八丁堀の笹野様から、今年の正月は役向きの方が忙しくて、呼んで吞ませる折もなかつたから——と、届けて下さつたのは、三升」

「へエ」

「縮尻しくじつてばかり居る俺が、この酒が吞めるか吞めねえか考へて見ろ」

「そんなに癪しゃくにさはる酒なら、あつしが身代りに頂きますよ。三升もあると、ちよいと良

いおしめりになりますね」

「舌嘗したなめずりをして居やがる。——その上あれを聴かないか、九月十五日の神田祭を待ち兼ねて、金があつて、暇でく仕様のない旦那衆が、界隈かいわいの若いのおだてて、妻戀つまこひ稲荷いなりの後ろの大野屋を借り受け、初午はつうまの日に世直しの稲荷祭りの大騒ぎをやらかさうといふ企たくらみだ」

「悪くねえ話ぢやありませんか。その話なら、あつしも掛り合ひがあるが」

「半月も前からの稽古で、夜も寝つかれやしない。飛んだ世直しだよ」

平次が腹を立てるのも無理のないことでした。江戸の有閑人達は、景氣が良いにつけ惡いにつけ、お祭り騒ぎをして、呑む機會を作らなければ、この世の中は張合ひがないやうな氣がするのでせう。

「あつしが笑つたのは、そのお祭りに出る所作しよさくの話ですよ」

「そんな話なら、可笑しくも何んともないぢやないか」

「親分は——その日の所作に、坂屋のお妙たへが、新作の『江口』を踊るといふ話を聞いたでせう」

「坂屋のお妙といふのは、あの女か」

「へエ、あの女で」

この邊では、たゞあの女で通る坂屋のお妙は、妻戀稻荷の横に住む、何んとか流の踊りの師匠ししやうですが、それは満身にたぎる魅力を踊りにかこつけて撒き散らし、山の手一帯を桃色に興奮させるやうな大變な女でした。

「お妙が何を踊らうと、お前が可笑しがるわけではないだらう」

「それが大ありで、『江口の君』といふのは、昔々大昔の華魁おいらんだ。一休きう様と掛け合ひの歌を詠んで、普賢菩薩ふげんぼさつに化けた——」

「お前の話は少し頓珍漢とんちんかんだよ。普賢菩薩が、衆生濟度のために、江口の遊君いうくんに現じたといふ話だらう」

「そんなことはどうだつて構ひませんよ。兎も角も、坂屋のお妙はその江口の君とやらになつて、象に乗つて所作事をする」

「普賢菩薩なら、象に乗るのは當り前だが、今時江戸に象は居ないよ、——それを豚の子で間に合せるとも言ふのか」

「ところが、象が居るんですよ。——親分も知つて居るでせう、金澤町の岡崎屋三十郎、昔は大した家柄だが、近頃は商賣の方がいけなくなつた上、五年越しお妙に入れあげて、

近頃はその日にも困るといふ、大變な落ちぶれやうだ」

「その岡崎屋三十郎が象になるといふのか」

「貧乏はしてゐるが、二十三貫といふ、水ぶくれの三十郎だ。裸になればそつくりその儘
びやくざう
 白象ぢやありませんか。お妙がその上へ横乗りになつて、江口の遊女姿で、精一杯の
 色氣を撒まき散らす趣しゆかう向と聽いて、あつしはもう、可笑しくて、可笑しくて、ウ、フ、フ、
 フ」

八五郎は三十郎が素つ裸になつて、象の振り宜しく、お妙に御せらるゝ馬鹿々々しさを
 考へて、たまらず腹を抱へるのです。

二

岡崎屋三十郎と、踊りの師匠のお妙との關係は、平次も一應は聽いて居りますが、八五
 郎の説明で、その馬鹿々々しさが強調されて行くのでした。

お妙といふのは、五六年前何處からともなく流れて來た女で、素姓も人柄もわかりませ
 んが、その藝は兎も角として、男好きのする非凡な魅力を持つて居たので、代る／＼パ

トロンがつき、二三年のうちに、大變な人氣を集めてしまひました。色白で背が高く、バネの入つたやうな身體——それは、昆蟲こんちゆうの美しさ、毒々しさと、そして限りない魅力の表現でした。

年は、何年か前から、二十五と言つて居りますが、本當のことは誰にもわかりません。皮膚はくすんだ眞珠色で、眼は赤ん坊のやうに、清純で碧々あをくとさへして居りました。こんな眼は併しかし、測はかり知ることの出来ない、智慧と情慾とをかくして居ることでせう。

この女の最初の印象が、童女のやうに清らかなのは、その碧あずんで見える眼と、唇の素晴らしい曲線カーブのせゐだつたでせう。肉色に褪あせてゐるくせに、右左へ巻き上がるやうに食ひ込んだ曲線の美しさは、尊い佛の慈悲の相とも見られ、三千年の媚こびをたゝへた、ハガーの妖女の、邪惡な唇とも見られるでせう。

この女のために、身しん上しやうをいけなくしてしまつた男は、何人あるかわからず、この女のために、命を失つた男も何人かはある筈です。かうした女は、男の怨みが燃えさかれば燃えさかるほど、その美しさを鍛きたへ上げられ、男の血を流せば流すほど、その智慧たくまが逞たくまくなることでせう。

「何しろ、大變な評判ですよ。あの女の命を狙つて居るのが、ちよいと勘定しただけでも、

五人や三人はある中で、尻けつの毛まで抜かれたやうな、岡崎屋三十郎をこの寒空に裸にして、その背中の上で所作事しよさごとをやらかさうと言ふのだから、これが無事に行きましたら、お目にかゝりたいくらゐのもので、へッへッ」

八五郎は下司な笑ひを笑ふのです。

「岡崎屋三十郎は、そんな馬鹿なことを承知したのか」

「大喜びですよ。——さうでもしてやつたら、お妙が喜ぶだらうと」

「——」

「男が馬鹿になると、手の付けやうがありませんね。——神田で何番と言はれた岡崎屋を、一とたまりもなく身代限りをさせた上、女房のお美乃は乞食同様になり、自分も落ちるところまで落ちてしまつて、その日にも困る仕儀になつても、まだあの女の後を追つかけて、野良犬のやうに尻尾を振つてゐるとは、何んといふことでせう」

「——」

「その上二十三貫の親豚のやうに肥つた身體を、裸になつた上、生身に白粉を塗つて、赤い腹掛よだれがけに涎掛たてひやうこをし、立兵庫うちかけすがたに髪を上げた、襦袢姿のお妙を乗せて、振事をやるといふから、あつしは笑つて笑つて笑つてやりましたよ。あんまり笑つたんで涙がこぼれ

た程で」

八五郎はさう言つて、惚れた者の哀れさを輕蔑するより、武士の情け見たいな悲痛な顔をして見せたりするのです。

「そこまで行くと氣の毒だな」

「他人の私でさへ可笑しくて、腹が立つて涙がこぼれますよ。乞食よりもひどい恰好で、取拂つたもとの店のあとに、犬小屋のやうな物置に住んでゐる、三十郎の女房。昔は岡崎屋の内儀のお美乃が、齒ぎしりして口惜しがるのも無理はありませんね」

「お妙には配偶はないのか」

「木之助といふ野幫間のやうな野郎が、昔の亭主だつたと言ひますが、これも一と身上をつぶした上、上方から追つかけて來て、今では、時々お妙の家を覗いて、お小遣にあり付いて居るやうだから、大した睨みも利きやしません。尤も余つ程痛いところを握つて居ると見えて、この男が貰ひに行くと、お妙も嫌とは言へないやうで」

「それつきりか、お妙には身寄りも何んにもないのか」

「妹が一人ありますよ。お菊と言つて十八の、良い娘ですが、これは又姉のお妙の妹とは思へぬ不纏織で、眞つ黒で、横太りで、朝から晩まで、下女代りに働いて居まさア——姉

のお妙は二十五と言つても、二つや三つはサバを讀んでゐるだらうが、妹のお菊は十八と言つても、うけ合ひ二十二三には見えますよ。——尤も本當の姉妹でないといふ話もあるが、そこまではわかりません」

「——」

「外には、安五郎といふ男が一人居ます。下男だか庭掃きだか、居候だか知らないが、十二三のこれはのつペりした野郎だ。尤も生れは、松前とか奥州とか、餘つ程北の方で、^{なまり}訛がひどいから、話は半分しかわかりません。鼻の曲つた^{さげ}鮭みたいな野郎だが、色が白くて背が高くて、飛んだ好い男ですよ」

「それつきりか」

こんな馬鹿々々しい話を、平次は神妙に聽いて居りました。妖^{あや}しく美しい踊り手お妙をめぐつて、何んとも説明の出來ない豫感があつたのです。

三

二月四日の^{はつうま}初午、妻戀坂の大野屋に、底抜けの遊びが始まりました。江戸の有閑人た

ちは、名目さへ立てば、時も處も構はずに、茶番狂言、お温習、手踊り、素人芝居——と、果てしもなく享樂を追ひ求めるのでした。

それは、権力と因習に押し付けられてゐる、日頃の屈托に對する、僅かな息抜きでもあり、若い娘達を集めての、戀の狩人達の冒険でもありました。

その日の番組の馬鹿々々しさと、賑やかさは、今更語るまでもないことでせう。番數も進んで、夜の亥刻（十時）近くなつて、大切に出したのは、坂屋のお妙の踊る『江口の君』新作の踊りで、一休禪師には、名ある歌舞伎役者が附合ひ、一流の出語り、贅澤過ぎるほどの舞臺裝置、大道具小道具にも贅を盡して、大野屋の大廣間の幕が開いた時は、集まる客の數は百人を超し、思はず歡聲をあげたのも無理のないことです。

金糸銀糸の刺繡をほどこした褌襠、天地紅の玉章を、サツと流して、象の背に横様に乗つた立兵庫、お妙の美しさは、人間離れのしたものでした。

その普賢菩薩を乗せた白象といふのは、二十三貫の大男、全身に白粉を塗つて、赤い禪をした岡崎屋三十郎の、醜くも淺ましい姿です。振事が眞面目であれば眞面目であるほど、人々の哄笑は、潮が去來するやうに、夜の空氣と、囃子方の鳴物を壓して、どつ、どつと波打ちます。

その間にも普賢菩薩のお妙が、人間象の背の上で、兎もすれば安定を失つて、見物がドツと笑ふのが、囃子方の鳴物や、地方ぢかたの唄を壓して、氣が遠くなるほど、夜の空氣を揺すぶります。

「たまらねえな、こいつは」

見物に交つた八五郎は、兩手りやうてを揉み合せて、獨り悦えつに入るのを、並んで見て居る平次が何遍ひぢ脇で突いたかわかりません。

普賢菩薩のお妙が、象から滑り落ちさうになると、あわてて、その象の首に獅し噛みつきます。普賢菩薩のお妙の神々しいばかりの美しさに比くらべて、三十郎の象の顔が、何んと醜みにくく浅ましいことか。

「八、もう歸らうよ。こいつは見ちや居られないよ」

平次もさすがに嫌になりました。惚れ抜いて、金も見識も、見榮も命も要らなくなつた男の、世にも浅ましい見本を見せられるやうな氣がして、吐氣はきけを催すやうな胸の悪さを覺えたのです。

やがて振事が濟んで、最後の見得になりました。舞臺正面、描いた後光の前に立つて、江口の君なるお妙が、昇天の菩薩ぼさつの形になるのですが、鳴物につれてその座に直ると、

「あつ」

お妙の普賢菩薩が、三十郎の白象の背から、ズルズルと滑り落ちたのです。舞臺の上に飛び散る血。

「どうした、師匠」

お妙の身體を抱き起したのは、白象の三十郎でした。續いて、ドツと立ち騒ぐ人垣、鳴物も踊り手も後見も、不意の出來事に驚きながらも、この美しい犠牲いけにへを、八方から擔かつきあげたのです。

「どうしたどうした」

「目を廻したのか」

「いや、刺されたのだよ」

大勢の手で抱き起されたお妙たへは、最早頼み少ない姿です。

やゝ遠く距れて、踊りを見て居た平次と八五郎は、立ち騒ぐ人々を掻きわけて、一瞬のうちに、お妙のところへ飛び付いて居りました。

「退どけく、皆んな退どいてくれ」

平次がさう言ふのにつれて、

「まごくしやがると掛り合ひだぞ。お妙を殺した下手人は、この中に居るに違ひない」
 八五郎は、彌次馬を追つ拂ふ術を心得て居ります。

四

あとに残つたのは、白象の三十郎と、お妙の後見をして居た、妹のお菊と、それから平次と八五郎の四人でした。

「醫者だ、醫者だ、早く、早く」

八五郎が怒鳴ると、大野屋の若い者が心得て飛んだ様子です。

三十郎の腕の中に、ガツクリとうな垂れたお妙は、もう最後の痙攣に、僅か生命の名残りを止めるだけでした。不思議なことに、傷は二つ、白くて丸い右の喉笛に突つ立つたのは、ヒヨロヒヨロした楊弓の矢で、もう一つも同じやうな楊弓の矢、これは左の眼の下をかすめて、後ろ幕の裾に落ちて居るのでした。

矢は二本共楊柳の枝で造つた本格のもの、どんな急所を射たところで、人の命などを奪れさうな代物ではありませんが。

醫者が来る前に、お妙の命は絶えました。平次はそつと喉笛に突つ立つた、楊弓の矢を引抜いて見ると、これは何んと、唯の楊弓の矢と違つて、その根は一種の鏑かぶらになり、毒蛇の首のやうに、不氣味なフクラミを持つて居るのです。

醫者を待つてゐるうちにも、三十郎の悲嘆は目に餘りました。裸になつて、赤い禪ふんどしをしめて、赤い腹掛をかけ、全身に白粉を塗つた三十男が、見榮も外聞もなく、女の死骸を掻き抱いて、ワアワア泣き騒ぐのです。

それも、義理や誤魔化して泣くのではなく、聲をあげて泣く姿は、譬たとへやうもなく醜しうく怪わいで、八五郎などは、

「確りしろ、大の男が何んといふザマだ」

などと、間違つたやうな顔をして、二つ三つどやし付けた程でした。

やがて駆けつけた醫者は、金澤町の奎庵けいあんといふ五十年輩の坊主頭でした。お妙が死んで居るのを見て、

「あ、たうとう」

醫者に似氣ない、含ふくみのあることを言ひます。

「奎庵先生、これはどうしたことせう。楊弓の矢で、人間が頓死をする筈はなく、それ

に、眼の下も喉も急所は除けて居るし、この通り血がいくらも出ないところを見ると、命に拘かはる傷ぢやないと思ふが——」

平次がさう聽くのも無理のないことでした。

「尤もだが、錢形の親分。よく見てくれ、この喉へ突つ立てた矢は、唯の矢ぢやないよ」

「?」

「矢尻が、煙管きせろの吸口のやうになつて居るだらう、——この鏢かぶらの中になにか入つて居るに違ひあるまい」

「?」

「嗅いで見るが宜い、少し脂臭やにいやうだ。ね、その通り。そこで、その鏢の中へ、松前のアイヌが熊狩りに使ふといふ、毒をつめたとしたら、どういふものだらう。これくらゐの傷で、人一人殺すのは、毒矢の外にないが」

「どうして、そんなものを?」

平次もあまりのことに、二の句が繼げません。

「毒は——南蠻物でなければ、アイヌが使ふといふ、鳥とり兜かぶとの根を煉つて、膏藥のやうにしたものだ。——それを誰がやつたか、其處まではわからない。では、あとのことは、

錢形の親分に頼みましたよ」

醫者の奎庵は、一人呑込んで立去つてしまひました。

「親分、お客様をどうしたものでせう。これだけ多勢居るんだから、皆んな調べたひにや、夜が明けてしまひますよ」

舞臺の不氣味さを避けて、家中の隅々に、思ひくゝに集まつて、言葉少なに様子を見てゐるのが、ざつと百二三十人もあつたでせう。八五郎がさう言ふのを聞いて、多勢の眼が平次の方に向ひました。

「皆んな歸してくれ、いつまでも引留めちや氣の毒だよ」

「大丈夫ですか、この中に下手人が交つて居るに違ひないんだが」

「大丈夫だとも、出來心でやつた人殺しぢやない。あとで手繰つたところで、差支はあるまい」

「さうでせうか」

八五郎は不安でしたが、それでも平次がさう言へば、一應歸す外はありません。

五

多勢の客を歸したあとが、平次の舞臺でした。殺されたお妙と、深い關係のあるものだけ、五六人を殘して、平次の調べは其處から始められたのです。

大野屋の大廣間、晝から外神田一圓を見おろして、なか／＼の景色ですが、火鉢を一カ所に集めて、殘された人達は、寒々とした顔を集めて居ります。

平次はその隣りのいつもは樂屋がくやに使ふ八疊を借りて、一人づつ呼出して見ました。

第一に呼出されたのは、當夜の勸進くわんじんもと二元で、この催しもよほの金主で、お妙のパトロンになつて居る、神田鍛冶町の金貸、佐渡屋金兵衛。これは五十五六のいかにも迷惑さうな、そのくせやゝ高慢な感じのする禿頭はげあたまでした。

「いやもう迷惑なことで、——あの女は浮氣で剛情で、手のつけられない女でしたが、御存じの通り、千人に一人といふきりやうで、親分の前だが、大した女でしたよ」

非凡な素質に恵まれた、稀代の妖婦お妙うしなを喪つて、佐渡屋金兵衛は惜しさうに舌嘗したなめずりをするのです。

こんな野郎があるから、世の中が面白くないんだ。——さう言つた心持で、禿茶瓶はげちやびんを睨んで居る八五郎は、飛びかゝつて横つ面でも張り倒しさうな氣組でした。

「そのお妙を怨んでゐる者も少なくないやうだが」

平次が穩かに訊くと、

「そりやもう、お妙を殺したいほど怨んでるのは、私の知つてゐるだけでも五人や六人ぢやありません。先の亭主の木之助などは、いつか一度は殺して見せると言つて居たさうで、その癖時々お小遣をせびりに來るのだから、内々はお妙大明神だつたかも知れせんよ」

金兵衛の話は妙に行届いて、氣になるほど機微うがを穿うちます。

「それから？」

「象になつた岡崎屋三十郎さんはあの通り、お妙のために、大きな身しんしゃう上うを潰した上、女房にも別れ、恥も外聞もない身になりながら、いまだにお妙にへバリついて、泣いたり口説いたり、この寒空に裸になつたり、——惚れた男といふものは、淺ましいものですね。尤もあれはお妙を殺す氣なんかありません。焼いて粉にして酒で飲む方で、へツ、へツ」

「——」

金兵衛がへらへら笑ふと、八五郎はでつかい拳けんこつ骨こつを拵うなへて、夜の空氣の中に、唸うなりを生ずるほど振り廻して居ります。

「お妙を一番怨んで居るのは、三十郎さんのお神さん、もとの岡崎屋の内儀のお美乃さんでせうよ。あれだけの店まで賣つて、その跡に小屋をかけ、乞食のやうな暮しをして居るのですから」

「下男の安五郎と、妹のお菊は？」

「安五郎も、お妙に氣があるんでせうな。給金なしで、あんなに働いて居るくらゐだから。お菊の方は、ありや、妹といふのは嘘で——顔を見たつてわかるでせう。妹分といふことにして、下女の仕事をさせて置くのは、人を使ふ秘傳ださうで、これはお妙が自慢をして居りましたよ。——時々貰い物の菓子か、お菜かずのお裾すそわけでもやれば、給金がなくても、喜んで働いてくれるとね。——尤も、禿頭の私はその眞似をしたところで、私共の店では、奉公人は三日と居付いちやくれませんが、綺麗な女は得ですね。ハツ、ハツハツ」

ヘラヘラ笑ひを残して、金兵衛が去ると、八五郎は楊弓の矢を二本持つて來て、眼の色を變へて平次にさゝやくのです。

「ね、親分。この矢を灯ひの下でよく見ると、矢筈やはずの下の漆うるしの上に、金文字で『岡三』と書いてありますよ」

「何んだと」

「岡崎屋三十郎は、まだ暮しのよかつた頃楊弓に凝つて、かなりの腕前だつたさうですよ。あの野郎ぢやありませんか」

八五郎の鼻は蠢めきまず。

「いや、背中にお妙を乗せて居て、楊弓を射られるわけはない」

「さう見えばさうですが」

「お前は岡崎屋三十郎の家を知つてるだらうな」

「知つてますとも」

「あの内儀をそつと連れて來てくれ。嫌がるかも知れないが」

「やつて見ませう。お妙が殺されたんだから、せめて、その面でも見てやれとか、何んとか言つて」

「餘計な細工さいくをするな。——どうしても嫌だと言つたら、亭主の三十郎が、お妙殺しの疑ひで、縛られるかも知れないと言へ」

大呑込みで八五郎は飛んで行きます。

續いて、お妙の前の亭主であつたといふ、木之助が呼出されました。

これは七つ下がりの衿あはせを引摺るやうに着て、小紋の羽織を引つかけた、三十二三の青黒

い男で、昔は随分好い男でもあつたでせうが、病身と貧乏に押負かされて、ヒヨロヒヨロになつて居る癖に、色氣と慾だけは、存分に身につけて居ると言つた感じの男です。

「お妙があんなことになつて、良い氣味でしたよ。——さう言ふと私が下手人見たいですが、——飛んでもない。あの時私はお帳場で、大野屋の番頭さんと話して居たんですから、どんな口を利いても、疑はれる心配はありません。——あの女は、あんな最期を遂げるのも約束事ですね。浮氣で慾張りで、男をゴミほどにも思つて居ませんでした。現に、お菊や安五郎はうまい事を言はれて、三年越し唯で奉公してゐるし、あの女の爲に身代をいけなくした男は何人あるか、勘定しきれません。——私はあの女の弱い尻を知つてゐるので、大きい聲で言ひ觸らされるのがいやさに、蚊の涙ほど貢いで居ましたが、水の手がきれさへすれば、私だつて殺す氣になつたかもわかりません」

木之助の言ふことは、まことにヌケヌケして居りますが、その口幅つたい言ひ草から考へても、下手人らしくはありません。

六

下男の安五郎は、見事な男でした。少し縮れつ毛で、背が高く、色が白で、髯の跡が青々として、なかくの男前です。

言葉はひどい訛りで、半分は聞き取り兼ねましたが、そのメラメラと燃えるやうな眼や、唇の赤さなど、男にしては珍らしい特徴です。

「お前は何處の生れだ」

「松前で生れましただよ。——江戸へ来て二年になります。給金は貰はねえが、時々お小遣は貰ひました。——師匠さんは、良い人だったよ、誰にでも親切で——」

ボツリボツリと嘔んで吐き出すやうな言葉です。

「奉公人なら身許引受人はある筈だが」

「そんなものはあるねえだ。給料を貰わねえから、身許なんか、何んだつて宜かんべえ」なるほど、さう言つた理窟もあるでせう。

その次と呼んだのはお妙の妹と言ふお菊でした。十八九、——どうかすると二十歳以上にも見える頑丈な娘で、横肥りの赤ら顔の、申分なく醜いくせに、何處かに娘らしさがあ
り、その素朴さが、妙に人の好感を誘ひます。

「房州の生れですが、親はありません。奉公してから三年になります。お師匠さんはよ

くして下さいました。『私は一人ぼつちで親も姉妹もないから、妹分になつて、お互ひに助け合つて行かうぢやないか』とお師匠様が言つて下さつて、それから三度の食べ物も、一緒に頂きました。そして私も、給金を頂かずに、働くことにいたしましたのでございます」

この話の中には、何やら腑ふに落ちないものがありますが、平次はそれはそれとして、

「お前は下男の安五郎をどう思ふ」

突然こんなことを訊くのです。

「さア、別に」

「お前達の間には、何にか約束があつたのではないかな」

「いえ」

お菊は眞つ赤になつて、平次の引留めるのも構はず、隣りの部屋に逃げ込んでしまひました。

その隣りの部屋、皆んなが待機してゐる、曉近い大廣間には、此の時、一と騒ぎが始まつて居りました。

「嫌、嫌だといふのに、この人は何んといふ解らない人だらう。貧乏はして居ても、私はまだ三十前だよ。こんな身みなり扮をして、人の前へ出られるかどうか、考へて見ておくれ」

さう言つて、入口の戸に獅^し噛^がみついたまゝ、必死の抵抗を續けるのは、二十五六の見す
ぼらしい女でした。みすぼらしいといふにも程度がありますが、二子^{ふたご}の柄^{がら}も縞^{しま}もわからぬ
腰卷の上に、ヨレヨレの印^{しるし}半^{はん}纏^{てん}を引っかけ、猫の百尋^{ひろ}のやうな三尺帶、髪は埃^{ほこり}だら
けで、蒼黒く瘦せた顔は、この世の者とも思へぬ凄まじさです。

「何を言ふんだ。お前の亭主の三十郎は、お妙殺しの下手人で、縛られかけてゐるんだぜ」
「嫌だつたら、嫌さ。私はもうあの人の顔なんか、見たくもない。處刑臺に乗りや、宜い
氣味ぢやないか、畜生ツ」

女だてらにこんな口をきいて、入口の敷居の前に坐り込んだまゝ、必死と八五郎に反抗
するのです。

七

その時平次は、岡崎屋三十郎の調べを始めるつもりで、大廣間に入つて來ました。白象
になつた三十郎は、さすがに肌寒かつたものか、小女が持つて來てくれた、自分の着物を
肩に引つ掛け、お妙の死骸の側に、首うな垂れて居ります。

大の男が痴呆と醜體の限りを盡して、たいして恥入る風もありませんが、それでも時が經つにつれて、曉方の風が身に沁みると、いくらかは本心を取戻した様子です。

「錢形の親分、——聽いて下さい。皆んな申し上げますが」

三十郎は平次の顔を見ると、急に正氣づいたやうに膝行り寄るのでした。

「どうしなすつた、岡崎屋さん」

平次は少しわざとらしく丁寧に應へました。

「私を縛つて下さい、錢形の親分。お妙を殺したのは、この私でございます」

三十郎は立ち上がつて、平次の袖に縫り付かうとしましたが、興奮して見當が外れたものか、空を泳いで、ペタリと尻餅をつくのです。

「何を言ふのだ、三十郎さん」

「私は、お妙の阿魔に、勝手にされ過ぎました。この上あの女を生かして置いちや、生きながら地獄の底まで陥ち込むに違ひないと思ひ、一と思ひに、手馴れた楊弓で射殺しました。お妙を殺したのは、この三十郎に間違ひもありません。その證據は楊弓の矢には金
 詩繪で一々私の名が『岡三』と描いてあります。さア、この私を、——私を縛つて下さ
 い」

三十郎は一生懸命でした。藻搔もがくやうに平次に縋りついて、赤ん坊見たいにわめくのです。

「何を言ふのだ、楊弓の矢はお妙の眼の下をかすつただけだぜ」

「いえ、もう一本の矢が——」

「その矢は、鏑かぶらになつた矢尻やしりが重いから、楊弓ぢや飛ばない」

「それを私は、手に持つて、お妙の阿魔あまの喉へ突つ立てました。私が」

「その矢を、踊りを踊る間、何處に隠してゐたんだ」

「私の、象の腹掛の下へ」

「嘘を言つちやいけない。腹掛の下に隠せば、矢尻の毒が腹掛へ附く筈だ。矢の根は脂やにのやうにベトベト粘ねばつて居るぜ」

「でも」

「お妙を背中に乗つけて、楊弓を射られるわけではないし、毒矢を隠す場所がないとわかると、——」

「いえ、私が殺しました。あの阿魔は、踊りが濟めば搦み殺して、一緒に地獄へ落ち込む氣で居ました」

三十郎は今度は本當に、身を顫はせて泣くのです。

が、その時、もう一つの事件が發展しました。入口の敷居際で、八五郎と争ひ續けて居た、三十郎の女房のお美乃は、遙かに三十郎の様子を見ると、八五郎の手をかい潜つて、今度は、尻切半纏しりきればんてんのまゝ、自分から進んで大廣間に飛び上がるのです。

「お前さん、——私だよ、私だよ。家から楊弓を持出して、あの女を射たのは。私はあの女の眼を射潰いつぶして、片輪にしてやりたかつたのだよ。皆んな踊りに夢中になつて居る隙に、私は雨戸の隙間から、あの女の眼を狙つたのだよ。——眼には當らなかつたけれど、あの女は、たうとう死んでしまつたぢやないか、天罰だよ、天道様は無駄には光つちや居ない。サア、あの女を殺したのは、亭主なんかの意氣地無しぢやない、この私だよ。錢形の親分、縛はりつておくれ。磔はりつけ刑柱ばしらを背負うらみはされたつて、私は怨うらみには思はない」

「本當か、矢つ張りお前がやつたのか」

「さア、私はもう、——」

お美乃はこの時始めて、側に居る亭主の三十郎を意識したやうに、すがり付いて、大泣きに泣くのです。

暫くの間平次は、三十郎とその女房の、感情の激動を眺めて、何んにも言はずに居りま

した。五六人残つた関係者は、大廣間の隅に引つ込んで、劇の一と齣ごまを眺めるやうに、この不思議な夫婦の演出を見て居ります。

「もう宜い、——二人共歸つてくれ」

「？」

「お妙を殺したのは、二人のうちの、何方どつちでもないよ。二人は何處へも行かずに、あのもの岡崎屋跡の小屋へ歸るのだ。一文商あきなひでも始めるなら、お妙へ入れ揚げた講中へ、奉加帳を廻して少しくらゐるの資本もつでは集めてやるぜ。——今までのことは夢とあきらめて、今日しんきから新規まき時なほ直なほしに踏み出すんだ」

「——」

三十郎とお美乃は、平次にさう言はれると、始めて自分に立ち還かへつた様子です。

「それぢや」

二人はうなづき合ひました。そして、手を合せて平次の方を拜んで居る三十郎を、女房のお美乃が引立てるやうに、縁側から霜の降りた曉天の往來へ、いそぐと姿を隠すのです。

「八、もう歸らうか」

「へエ？」

それを見送つて平次も立ち上がりました。

「夜の明けきらねえうちに歸つて、熱い茶でも呑んで寝るとしようか」

「下手人はどうするんです？ 親分」

「この裁きは、閻魔様に任せるよ。どりや」

平次は八五郎を促して、人々のけぐんな顔に見送られるやうに、霜の道を踏み出すのでした。

×

×

×

道々の八五郎の不服らしさ。

「大丈夫ですか、親分。お妙を誰が殺したんです。下手人は？」

「もう宜いよ八。下手人は手に手を取つて逃げ出してしまつたよ」

平次はけろりとしてこんなことを言ふのでした。

「すると、あの、三十郎とお美乃の——」

「いや違ふ。三十郎は何んにも知らないし、お美乃はお妙の眼を射潰したかつただけさ。

楊弓の矢は外れて、お妙は顔をやられたただけだ。——素人の手ぎはぢや、少し遠過ぎた

から、無理もないが」

「すると曲者は？」

「楊弓の矢尻を換^かへて、毒を仕込んだ^{かぶら}鏑^ら矢^やで、お妙の首筋を刺した人間が下手人さ」

「へエ？」

「あの鏑矢は重いから、楊弓では四五間もある庭先から飛ぶ筈はない。三十郎は裸に赤い腹掛一つで、あんな重くて長いものを隠し持つてる筈はないし、あとは、お妙の側に居たのは誰だと思ふ」

「さア？」

「氣がつくまい。——踊りの後見をして居た、お菊だよ」

「あの妹分の？」

「妹分といふことにして、三年も唯でコキ使はれた上、深く言ひ交^{かは}した好い男の安五郎を横取りされると、十八や十九の娘でも、ツイ取逆^{とりのぼせ}上せるよ。松前から來た安五郎が、熊狩の毒を持つて居るのを知つて、それをそつと持ち出し、岡崎屋の三十郎が、いつかお妙のところへ持つて來て忘れて行つた、楊弓の矢の根を、鏑^{かぶら}矢^らの根と入れ換へて、その中に毒を仕込んだのだらう」

「それぢや、引つ返して、あの安五郎とお菊を縛りませう」

「止せく、二人はもう奥州街道へ踏み出したよ。松前へでも落ち延びて、熊の子と一緒に暮す氣だらう。——俺が三十郎夫婦を調べて居る頃、手に手を取つて逃げ出したやうだ」

「すると親分」

「お前は黙つて居ろ。餘計なことを言ふと、俺がまた笹野の旦那に小言を言はれる」

「呆れたものですね」
あき

「俺も呆れて居るよ」

「もう一つ、わからねえことがあるんだが、——毒を仕込んだ、かぶらや 鐺矢の根は、何處から持ち出したんでせう」

「お宮へ行けば、鐺矢の一本や二本は何處にでも奉納してあるよ。深川の三十三間堂へ行つて見ねえ、半堂や四半堂に使ふ、子供づかひの鐺矢まで納めてあるぜ。をき 毒を射込むには、あんな良いものはありやしない」

「成る程ね」

「本矢は持つて歩けねえから、鐺矢の根だけ取つて、楊弓の矢にはめたのさ」

「器用なことをやつたもので」

「側に居る者を殺すんだから、それくらゐの工夫は要ることだらうよ」

平次の家はすぐ其處、女房のお静は寢もやらずに、二人の歸りを待つて居るのでせう。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第三十三巻 花吹雪」同光社

1954（昭和29）年10月15日発行

初出：「キング」

1954（昭和29）年1月号

※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：門田裕志

2016年12月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

毒矢

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>